

第11回（小高工業高等学校野球部監督 峯岸 聰）

「野村ノート」（野村克也著 小学館文庫）

私は、高校野球を指導することになったとき、これからは人の心を感動させることが大切だと考え、むさぼるように本を読んだ。読んでいくなかで、生徒の心を動かし、火を点けるためには言葉の力が大切になると感じた。そして、「リーダーとは何か」「指導者とは何か」「野球を教えるには、どうしたらいいか」など自分の指導を考え直すようになった。はっきりとした答えは未だに見つからないが、自分の方向性を見つけるきっかけになったのがこの著書である。

この著書は、ヤクルトの2軍グラウンドに「おかげさまで」と書いた紙が貼ってあったという出だしから始まる。「親のおかげ、先生のおかげ、世間様のおかげの塊が自分ではないのか」という言葉からも連想されるように、今の選手に最も欠けているのが感謝の心であり、感謝こそが、人間が成長していくうえで、最も大切なものであると野村監督は説く。そして個人の成長の集大成がチームとしての発展に繋がっていくのだと。選手には「人生」と「仕事」とは常に連動しており、人生論が確立されていないかぎり、いい仕事はできないことを覚え込ませる。そして『無形の力』をつけるのだ。技量だけでは勝てないと。『無形の力』とは、情報収集と活用、観察力、分析力、判断力、決断力、先見力、ひらめき、鋭い勘などである。私はこの文章を読んで感じたことはたくさんある。そして、私なりに考えて行っている本校での取り組みを1つだけ紹介したい。それは『挨拶』である。ただの挨拶ではない『世界一の挨拶』である。「あざーす」「した」など、言葉を略したり、流したりしてしまう生徒が野球部には多かったため、クラスではもちろん、生徒が朝起きてから仮設校舎に登校するまでの電車の中でも、部長の半澤先生と共に目を光らせている。他にも人間力を育成し、チームとしての在り方を考えさせるようなことに取り組んでいる。

本題に戻るが、この著書において、よい監督とは、まずは選手たちの人づくりに励む。楽天の一年目を引き受けた田尾監督以下のチーム首脳は全く人づくりを行っていなかった。息子のカツノリ氏から楽天一年目のキャンプの話を聞き、これではダメだと予想していた。もともと監督と選手の立場は正反対で、監督はチーム優先で考えているのに対して、選手は個人主義である。ところが、選手は自分の存在意義を知ってくれる人がいれば、「この人のために死んでもかまわない」と思ってしまうから不思議だと。「士（さむらい）は己を知る者の為に死す」という言葉があるが、リーダーのためという思いから、チーム優先に変わるのである。それが強いチームをつくる為の人づくりなのだ。

興味を持たれた方はぜひ、読んで頂きたい著書の一つである。